

加藤優美子

『深夜特急』 沢木耕太郎, 新潮文庫, 1994

あらすじ

著者である沢木さんが実際にユーラシア大陸を横断して目的地のロンドンへ旅する紀行文で、全6巻からなる。飛行機を一切使わず、バスや列車で移動する貧乏旅である。ルートは香港から始まり、マカオ、マレー半島、インド、ネパール、シルクロード、南ヨーロッパである。

片言の英語や身振り手振りでしか意思疎通ができないが、行く先々の人は彼にとっても親切にしてくれたり、互いの国のことを語り合ったりする。楽しいことばかりではなく、時にはお金に困ってひもじい思いをしたり、怖い目にあったりもする。特にインド、ネパールでは貧しい人々の生活や文化の違いが鮮明につづられており、読者に新しい発見をさせてくれる。ロンドンに到着すると、日本に帰る予定になっていたが、旅を終える気になれない著者はそのままアイスランドへ向かうことになる。

私が好きなところ

私はもともと海外のいろんな国に興味があったこともあり、また、読んでいだけで本当に旅している気分になれるという臨場感もあったためこの本がとても気に入っている。特に好きなのは、トルコ、ギリシャ編の第5巻である。この地域の人々は明るく人懐っこい性格の人が多くもあり、沢木さんはよく世話になったようだ。

私が特に心温まるいい話だと思ったのは、沢木さんとトルコの少年が出会ったシーンだ。言葉は通じにくい、少年の好意で沢木さんが行きたいと思っていた死海まで連れて行き、街をいろいろ案内してくれたのだ。別れ際に少年は手のひらを差し出して「マネー」と言った。沢木さんはてっきり

金目当てで道案内してくれたのだと思ったが、実はそうでなく、少年はただ日本のコインが欲しかったのだ。それもたったの1枚で満足そうに喜んでいる。それを見た沢木さんは今までわたってきた国のコインもあげようと、彼のホテルまで案内する。各国のコインを選ぶと少年は本当に嬉しそうに何度ももらっていいのか、と確認した。

(p55-p65)

有泉多佳子

浅田次郎「ラブ・レター」集英社文庫、2002年

「あらすじ」

歌舞伎町で佐竹工業が経営するビデオ屋の店長を任されているチンピラの吾郎は、佐竹から偽装結婚の話を持ちかけられる。戸籍を貸すかわりに謝礼金50万が入るといって吾郎は戸籍を貸す事にした。偽装結婚の相手は中国人女性の白蘭、彼女は体を売って稼いだお金で中国にいる家族を助けようとしていた。そんな白蘭を吾郎は写真で何度か見たことはあるが実際に会ったことは1度もなかった。ところが、ある日、吾郎は警察に呼ばれ忘れかけていた白蘭の死亡の知らせを受ける。吾郎は1度もあっていない妻の遺体を何故自分がとりに行かなくては行けないのか憤慨しながらも、遺体のある病院へと足を運んだ。そして、初めて白蘭の遺体に触れた吾郎は理由もなく涙がでた。白蘭の遺品のスーツケースを開けると吾郎宛

の1通の手紙があった。そこには自らの不幸な人生を嘆くことなく、吾郎への感謝と吾郎を忘れないように写真で毎日見ているうち好きになり吾郎の墓に入れてほしいという願いだけがつづられ手いた。吾郎は異国の地で死んだ白蘭の思いを痛感し骨壺を持って自分の家の墓へ向かっていった。

「感動した箇所」

私が死んだら、吾郎さん会いに来てくれますか。もし会えたなら、お願いひとつだけ。私を吾郎さんのお墓にいてくれますか。吾郎さんのお嫁さんのまま死んでもいいですか。誰よりも吾郎さんのこと好きです。痛いのが怖いのではない、吾郎さんのこと考えて泣きます。毎晩おやすみなさいのとき、きっとそうしたように、吾郎さんお写真見ながら泣いています。いつもそうなのだけど、やさしい吾郎さんの写真見ると涙がでます。悲しいのつらいのではなく、ありがとうで涙出ます。吾郎さんにあげられるもの、何もなくてごめんなさい。だから言葉だけ、きたない字でごめんなさい。心から愛しています世界中の誰よりも。(ラブ・レター、83p・84pから引用)

#### 「感想」

白蘭は異国の地に一人出稼ぎに来たのだから、本当は白蘭が一番苦しく助けてほしいはずなのに死ぬまで文句も何ひとつ言わず皆に礼を言った。白蘭の心は本当に綺麗だとおもった。また、白蘭は吾郎と1度も会ったことはなかったが、最後に書いたラブ・レターを見ると白蘭がどれほど吾郎を寂しかった心の支えとしてきたのかも伝わった。白蘭が死んだのは可哀想だが「死」という出来事により会うはずのない夫婦が会い白蘭の吾郎への想いが伝えられたのだと感じた。そして、吾郎もその優しさ溢れるラブレターを読み白蘭をいとおしく思うところに人が人を思うことの尊さがあるのだと感動した。

#### 瀧野百合香

アグネス・チャン『小さな命からの伝言』  
(新日本出版社、2004年)

この本は、子供たちの出会いの中で生きてきたアグネスさんが世界中で叫ぶことさへ出来ない子供たちから託された伝言を多くの人に伝えるために書かれた本です。

ボランティアやユニセフ協会大使として飢餓・人身売買・売春・エイズ・戦争紛争による戦禍の中で暮らす子供と出会い、その中で彼女は戸惑い、怒りを感じ苦しみました。しかしそれでも彼女は子供たちのために活動を続けています。現在テレビでも海を越えた地での難民の生活や飢餓に苦しむ子供たちの姿が映し出されています。しかし私たち日本人は食べるもの、着るものに困ることはなく、むしろ物が有り余っているという現実があります。そのため、それを実感として受け止め維持させる事は難しいと思います。

この本の良い所は、いわば恵まれた立場で暮らしている私たちがこうした問題をどう考え行動するのかというテーマに正面から向き合い応えようとする一人の大人と出会える所にあると思います。子供たちが直面している現実にはあまりにも残酷で眼をつぶりたくなるような現実ばかりです。しかしこの本が描くのは絶望ではなく希望です。そこに子供たちがいる限り希望がある、未来があると彼女は言います。貧困と内戦が多くの子供たちを兵士にしたり、飢餓に苦しませ死に追いやる。内戦の原因はその国が持つ豊かな資源です。人々は奪い合い、その背景に力の強い国同士の覇権争いがあるのだと彼女は指摘しています。

この本の中で印象的だったのは子供の売春が当たり前のように行われていて、その子供を買う大人がいるということ。この問題には貧困というものが関わっています。この貧困をなくすこと、そして大人が加害者にならないことが必要です。

では、日本は今何をすべきなのでしょう。ユニセフは現在、安全な水や食料の提供、予防接種、学校の再開の取り組んでいます。しかし、まだ治安は悪く本格的な援助はこれから始まるそうです。世界では120万人の子供が人身売買の犠牲になって

おり実態が見えにくいだけに目に見える戦争より恐ろしいと言えるでしょう。子供たちを奴隷扱いすることは許せません。日本人が加害者となる事は何としても避けたい。これらを根絶するために私もボランティア活動に関わっていきたくて思いました。今世界ではこのような現実が進行していることを決して忘れてはなりません。

地球上に生きる私たちにとっての幸せは『平和』です。唯一の被爆国として戦争の悲惨さを一人でも多くの人に伝えていかなければなりません。

「どんなに小さな生命もいつもキラキラと輝いていました。その輝きはどんな残酷な運命の下でも負けずに輝こうとしていました。私たちはそんな子供たちの生命の輝きを忘れてはいけなと思います。どんなに状況が厳しくてもそこに子供たちがいる限り希望はある、未来はあると私は信じています。彼らが直面している現実、耐えてきた苦しみを、ひとりでも多くの人に知ってほしい。世界中で叫ぶことの出来ない子供たちから託された伝言をみんなに届けたい。小さな生命たちよ、頑張っていきてほしい。幸せになってほしい。それが私の願い。生きている限りの願いです」。( 頁)

鈴木 遼平

三浦しをん『風が強く吹いている』(新潮社 2006年)

私が紹介する本は、「風が強く吹いている」である。これは、大学生活の中で、駅伝という共通の目標に挑む学生たちの、まっすぐで気持ちいい青春小説である。

あらすじ

主人公の走(かける)は、今年から大学に入った一年生だが、集団の中で束縛されて走ることを嫌い、つねに一匹狼であった。ある日、そんな彼が同じ大学の先輩、灰二

(ハイジ)に出会ったことで、彼の運命は大きく変わったのである。ハイジはボロアパートの寮監督をしており、走がそのアパートに入居したことをきっかけに、前々から企てていた計画を実行したのである。その計画とは、陸上競技とは無縁のアパートの住人たちと箱根駅伝に挑む、という無謀なものであった。たった十人で挑む箱根駅伝。その中で彼らは、ほんとうの強さとは何か、それぞれの目指す頂点とはどこにあるのか、迷い、苦しみながらも前に走り出すのであった。

感動したところ

まず、走るという単純な行動で全 508 ページにもなる壮大なドラマが出来上がったことに驚きを感じました。そして、どこか常識からはみ出してしまっているアパートの住人たちの日々の生活も読んでいて楽しかったです。白熱した駅伝のパートは、自分が走っているみたいに臨場感があって心が躍りました。最後に、この本は駅伝を通して生きるための本当の「強さ」を教えてくださいました。強さとは、単純に力が強いわけでも、足が速いわけでもなく、形にして見ることができないけれど、確かに感覚としてあるものです。言葉ではいえませんが、この感覚の一片は本の中で語られています。それは生きるうえでとても重要なことでもあります。この感覚を感じたとき確かに生きるうえで何かがよい方向に変わるでしょう。

気に入ったフレーズ

「長距離選手に対する、一番のほめ言葉がなにかわかるか」

「速い、ですか？」

「いや、『強い』だよ」

「速さだけでは、長い距離を戦い抜くことはできない。天候、コース、レース展開、体調、自分の精神状態。そういういろんな要素を、冷静に分析し、苦しい局面で

も粘って体を前に運びつづける。長距離選手に必要なのは、本当の意味での強さだ。俺たちは、『強い』と称されることを誉れにして、毎日走るんだ」(159頁参照)

岸 里織

東野圭吾『手紙』(文藝春秋社, 文春文庫, 2006)

強盗殺人の罪で服役中の兄・剛志と、強盗殺人の弟という過酷な運命を背負う直貴。兄は弟を大学に進学させたい一心で強盗殺人という罪を犯してしまう。刑務所にいる兄からは、月に一回、直貴に手紙が届き、兄の存在によって、直貴は、進学、就職、結婚と、ことごとく幸せの道を寸断され、その度に、絶望の淵へと突き落とされていく……。直貴は自分を理解してくれる、妻も得て、それから数年間はつつましくも幸せな日々を送るのだ。けれど、このレッテルははがれない……。直貴は最後、自分の家族を守るため、兄を切り捨て、あえて避けてきた残酷な選択を選ぶ。弟だけを生きがいにしてきた兄は、己の罪のために最後の家族を失ったのだ。この苦渋な選択の辛さが痛いほど伝わってくる。

直貴が就職した会社の社長が、諦めになじみ、多くの不安を抱えた直貴に言った言葉がとても印象的だった。「差別はね、当然なんだよ」「犯罪者やそれに近い人間を排除するというのは、しごくまっとうな行為なんだ」(317頁)「我々は君のことを差別しなきゃならないんだ。自分が罪を犯せば、家族をも苦しめることになる。すべての犯罪者にそう思い知らせるためにもね。」(319頁)と言った。

「差別はいけない」のだと、誰もが頭では思っているが、家族までもが社会からはじき出されていくことを、犯罪者は思い知らなければいけない。また、社会は、犯罪

者に思い知らせなければならない。だから、差別は当然なのだ、差別から逃げるべきではない、その不正に向き合うべきであると私も思った。人の絆、血縁とは、兄の犯した罪のとは、差別とは、愛とは・・・を深く考えさせられました。獄中から届く剛志からの手紙、被害者の家族の心にはどう届き、加害者の家族の心にはどう波紋を残すのでしょうか。罪の重さを、この本を通して一人ひとり実感し、人の目を憚らず、心の底から泣き、この問題に真正面から向き合っしてほしいと思う。この本の中で、あなたも、共にもがき、苦しみ、「差別は当然という世の中」で、生き抜く術を心に、しっかりと植えつけることができるでしょう。差別のない社会など存在しない今、この場所から逃げず、生き抜く力を、しっかり根付かせることができるはずです。

人が人の命を奪うことなど、到底許されることではない、例え、どんな理由があろうとも、罪を犯せば、家族をも奈落の底に落とし、一生苦しめることを、心に深く刻みつけ、どんな時でも、忘れず、真つ当に生きる、格差のせいにして、自分を悲観せず、無限の可能性を信じ、大切な絆を一本一本、繋いでいこうという、前向きな生き方の道標となる「手紙」。この本を読み終えた後、大切な言葉を今、一番伝えたい人に手紙をつづり、伝えてみてはいかがでしょうか。メールの文字とは違う、温もりある心が、きっと届くことでしょう。感動を呼ぶ不朽の名作「手紙」はただの「感動」という言葉では言い表せない、多くのことを考えさせてくれる一冊である。

藤江陽平

壺井 栄『二十四の瞳』(新潮社, 新潮文庫, 1957)

(あらすじ) 昭和三年、瀬戸内海に浮かぶ小豆島が舞台となる。この岬の分教場に大

石久子という若い女性教師が赴任してくる。洋服を着て自転車で通勤する彼女は、村の人々から好奇と非難の目で迎えられてしまう。なぜなら、この島では、珍しいことであるからだ。学校は交通がすごくふべんなので、小学校の生徒は4年生までが村の分教場にゆき、5年生になってはじめて、片道5キロの本校の小学校へ通うのである。分教場では今日から小学生になる十二人の子供たちが大石先生を待っていた。性格は様様な子供たちだった。先生と生徒の関係は直ぐによくなり、仲良くなった。大石先生と子供たちは歌を歌い、汽車ゴッコをして野原を飛び回った。だが、村の人たちの中には、大石先生に反撥を感じない人もしくは無い。なにしろ、大石先生は当時珍しいモダンガールだったのだから。九月になり、子供たちと浜辺で歌を歌っていた久子先生は、彼らがいたずらで掘った落とし穴にはまり足をくじいてしまう。怪我は思いのほか重く、アキレス腱をやってしまった。暫く学校を休むことになった。彼女のもとに、ある日子供たちが見舞いに行くことと決めた。彼らの大石先生を慕う気持ちは、村の人たちの目を変えさせたが、彼女は遠い分教場へ通うことができず、やむなく本校に転任することになった。子供たちの涙に送られて、大石先生は岬を去った。五年の月日が流れた。その間に満州事変、上海事件、世の中は不況の波に押しまわられていた。六年生になった子供たちは本校に通うようになった。そして、子供たちの卒業とともに大石先生は教壇を去った。それから八年、戦争のさなか、主人公の十二人の子供達は肺炎で死んだり、戦死した。終戦を迎えた後、彼女は再び分教場の教師となる。ある日、大石先生を囲んでかつての教え子たちが歓迎会を開いた。美しい声で思い出の歌を歌う生徒、記念写真を愛おしく指でなぞる失明した生徒、二十四の瞳は十に減って

いた。大石先生の目にはとめどなく涙があふれた。

(感動した所) 大石先生が落とし穴にはまり、足を怪我してしまったので、その見舞いに行く所ので、十二人で相談して二里もある道を空腹と疲労にさいなまれながら歩いてきたのだ。やがて泣き出す子供たち。そこへ、バスが通りかかった。「大石先生だ！」 気付いた大石先生が松葉杖を付いて降りてきた。「皆、どうしたん」「大石先生の顔が見たかったんや」大石先生を取り巻き泣き出す子供たち。大石先生も泣いた。その後、大石先生の家で子供たちは大いにもてなされた。記念写真を撮り、船で帰されたのだった。そして、8年以上たち、先生と生徒が集まった歓迎会である。戦争で視力を失った、生徒が見えない目であつての写真を指でたどっていく。「この写真はなあ、見えるんじゃ、なあほら、まん中のこれが先生じゃろ？その前にわしと竹一と仁太が並んだら・・・」(「二十四の瞳」P64-65, P210-211)

(感動した所を読んで) 怪我した大石先生のお見舞いのために生徒全員が2里もある道なのに歩いて行くところだ。空腹、疲労にさいなまれながら歩いて行く所は凄いと感じた。先生と生徒が会って生徒が泣き、先生が泣き、生徒がどんだけ先生の事を愛しているのかがよくわかる。また、先生も生徒の事をよく思っているのがわかる。そして、戦争で目が見えないながらも頑張っで写真に写っているみんなを探す所に先生も友達もなくてしまうのだ。戦争というのが、どれだけ人の人生を駄目にするのか、悲しみが増えるのかを訴えているのが伝わる。この歓迎会やるのに本当は12人全員集まらなきゃいけないのに、7人しか集まらなかった。この時代、戦争の時代に生まれたからだ。戦いたくなくとも戦争に無理やり出される。時代の傷を彼らは背負って

いる。私が今この時に普通に生きていることにどれだけ感謝しなければいけないのか。  
(感想) 今当たり前のことは、昔だと当たり前じゃなくなる。学校に行きたくても行けなくて、好きなことさえもできない。国のために戦場で戦い、若い歳で死んでいつている。病気とかじゃなく、人の武器・手によって。これは一体どういうことであるのか。そもそも武器は、なぜ作られているのか。自分を守るためなのか。一人一人が平和の心を持てばそんなものは絶対に必要な物にならないと考える。そんな物を作るのではなく、地球のためになるものや、全ての人々が喜ぶものを作って欲しいものだ。まだ、今殺しは、続いている。本・テレビ・映画いろんな手段で訴えてきているのに。全ての人々が心から分らなきゃ何の意味もないのだ。私は、今、人の命の尊さを、しみじみとあじわえる歳になってきたと思う。だから、殺しというものは、早くこの世からなくなってほしいものだ。

山本愛莉  
宮部みゆき『ブレイブ・ストーリー』(角川書店, 角川文庫, 2004年)

あらすじ  
この物語の主人公は小学5年生の三谷亘。ゲームが好きな普通の男の子だ。しかし、彼の小学校にやけに澄ました感じの少年、芦川美鶴が転校してきた頃から亘の日常は一変する。両親の離婚話が持ち上がり、亘の父が家を出て行ってしまったのだ。父は再婚を考えていて、しかも相手はすでに妊娠していたのだ。大人たちの勝手に振り回され傷つく亘。そして、ついに亘の母は夜中にガス栓をひねり、無理心中を図ったのだ。それを助けたのが美鶴だった。彼もまた幼いときに、父親の無理心中によって自分以外の家族を失っていたのだ。亘と美鶴は自分たちの不幸な運命を変えるために、

テレビゲームのような異世界“ヴィジョン”へと旅立つ。しかしそこで叶えられる願いは一つのみ、亘か美鶴どちらかの願いしか叶わないのだ。二人はそれぞれの旅を開始する。ヴィジョンでは、人種差別や宗教問題、戦争などといった現実の問題と似通った問題があり、亘は旅で知り合った仲間たちと真摯にそれらの問題と向き合っていくうちに、この旅の真の意味を知り、何事も受け入れ、向き合っていくという“勇気を手に入れる。そこで、亘はこの旅を通し変えるべきなのは運命ではなく、自分自身だということに気づく。一方美鶴は単独での旅を好み、異世界であることをいいことに、自分の目的達成のためには手段を選ばず、人を騙し、利用し、そしてついには殺してしまう。しかし最後には大きくなりすぎた美鶴の“憎しみ”という負の力に、美鶴自身が敗れてしまうのだ。そして亘は唯一の願いをヴィジョンの平和のために使い、この長い旅の終止符を打つのだ。

感想

この物語はファンタジーだが、異世界の設定に人種差別や宗教問題など、現実問題を多く反映している所や、物語の3分の1で三谷家の離婚話を細かく絵描いている所が、今まで読んだことのあるファンタジーとは少し違っていて、面白く感じた。ファンタジーというと子供向けのイメージがあるが、大人が読んでも楽しめるファンタジーだと思う。真面目な亘と、ずる賢い美鶴の旅は、人生の教訓を説いている童話みたいに思えた。

田中 悠子  
山田詠美『無銭優雅』(幻冬舎, 2007)

あらすじ:

40歳を過ぎた独身の男女が恋に落ち、愛を見つめ、家族を見つめ、そして、『死』を見つめて不思議な付き合いを始める。「心中

する前の日の心持ちで、これからつき合っ  
て行かないか？」(9 ページ、10 行目)

主人公の女性は『慈雨』と言い、40 歳を過  
ぎても独立せず、結婚もしていない。そし  
て相手の男性は『栄』と言い、塾の講師を  
しているバツイチ、隠し子もいることが後  
に発覚する。この二人が恋人関係になるの  
だが、40 歳を過ぎていくせに、『大人』  
の恋愛とは言えないような無邪気で幼い恋  
をする。例えば、「運命」なんて言葉を使っ  
てみたり、浮き沈みが激しくなったり。二  
人は幸せだった。が、そんな時、事件は一  
度にやって来る。『慈雨』の父の死、そして  
『栄』の過去についての嘘。『慈雨』は全て  
が不安定になってしまう。

しかし不思議と、ちゃっかり最後には、仲  
直りをする。気付かぬうちに、とてもユー  
モラスな世界に引き込まれる、そんな小説  
だ。

感動した点：

感動、とは言い難いので、印象に残ってい  
る点を挙げようと思う。

印象に残った点：

まず、私がこの本を手にしたきっかけが、  
この表紙だ。色こそないものの、妙に題名  
『無銭優雅』とも合っているような、色気  
を感じるような、この表紙。思わず、引き  
込まれて買ってしまった。

内容に関しては、とにかく、主人公の気  
持ちや発言がとても面白く描かれているの  
が印象的だった。擬音語や、私たちが普段  
口にする言葉が、何の飾り気もなく書かれ  
ているところが、本と言うよりも漫画を読  
んでいるようで、とても楽しかった。

それでは、この本の最初の部分を読んでみ  
たいと思う。

「みーみーと言って体をすり寄せて来る  
のは猫ではないのである。それは霊長類ヒ  
ト科の雄で、御年四十五歳。世の中では、  
おじさんと呼ばれる年頃ではあるが、私に

は、そう受け止めることが出来ない。それ  
は、私自身も同じ年齢だからであろう。ま  
わりの見えていない時の私たちは、いまだ  
少年少女。凶々しいなんて、これっぽっち  
も思わない。二人きりでいる時の私たちは、  
浮世を捨てて、みーみーと鳴く。ちゅんち  
ゅんとも鳴く。くんくんと鼻を鳴らしたり  
もする。わんわんとは吠えない。可愛くな  
いからな。動物の鳴き声はいたいけなのが  
よろしい。声帯模写をして、私たちもいた  
いけになる。馬鹿みたい？ いいじゃない。  
色恋なんて、なんでもあり。なんでも。普  
通、こういう場合、開き直りの精神が加担  
するので、「なんでもあること」の中には、  
不倫、とか、駆け落ち、とか、逃避行、な  
どという大胆不敵な事柄が含まれて来る。  
しかしながら、私たちは、そんな大それた  
ことを企てたことはない。思いつきもしな  
い。私たちの間柄は、とても慎ましやか。  
小心者たちだもの。ただ、ばっかみたい、  
に時間を共有するだけ。ばっかみたい、な  
ことを一回してしまうのは馬鹿だけど、百  
回もすれば、それが日常。ばっかみたい、  
な日常は、二人だけのいとおしいルールを  
創り上げる。人さまにはお見せ出来ない恋  
の有様をはぐくむ才能。これぞ年の功。み  
ー。」

ほら、不思議な本だ。

松澤美枝

市川拓司 『そのときは彼によろしく』(小  
学館文庫・2007 年)を読んで

本のあらすじは、池や水草が大好きで、  
人と接するのが苦手な少し変わった男の子  
智史と、ゴミが好きな男の子佑司、男勝り  
の花梨の大きく分けて 3 人の子供時代と、  
その 3 人と別れた 15 年後の大人になった  
様子を交互に話した話だ。

15 年後の智史が、美咲という女性に出会

い、子供の頃の思い出話をするところから話が始まる。3人は離れた後も手紙のやり取りをしていたが連絡が取れなくなり15年が過ぎる。そんなある日、智史の元に一人の女性が働きたいと訪ねてくる。名前は鈴音。その鈴音と一緒に居て話をしている内にその人が花梨だと判明する。鈴音は芸名である。再会を楽しむ。しかし、花梨は毎晩深夜になっても眠らず、薬を飲んでいった。そのことを気になっていたが、ある日、もう一人の幼馴染、佑司が意識不明の重体と連絡が入る。その夜に花梨が別れを告げる。そのときに智史は花梨に自分の思いを告げ両思いだと分かるが、帰りを待つのも花梨は断る。

花梨には、鈴音という姉がいて生きているが、20年間眠り続けている。花梨も姉同様眠り続ける病気で眠らないように薬を飲み続けていた。しかし、効き目もなくなり、永い眠りにつく前に智史に会いに来た。眠ると夢をみるらしく、天国のような場所で懐かしく優しくなれる場所。その夢を見続けると夢に囚われ永い眠りにつく。花梨は今、佑司はその場所にいるから私が迎えに行くという。そして花梨は永い眠りにつく。5年が過ぎ、姉の鈴音が目を覚ます。彼女は亡くなった智史の父親がああ夢の場所と呼んだから戻ってこられたという。父に伝言を頼まれる。花梨は自分がきっと帰らせる。息子に会えたら、そのときは彼によるしくと。あれから、何年かさらにたち智史が40歳になった頃、花梨が帰ってくる。

この小説には、人を思うこと、恋愛の中の別れ。人間誰もが人生の一度は経験するだろう心を描いています。たった一人の人をこの長い月日待ち続け、思い続けるということは難しく、容易に語れたりできることではありません。しかし、今の人に欠けつ

つある、思いやるという気持ちを素直に描いた作品で、入りこむことができる作品だと思いました。花梨が言っている夢の場所でそこが居場所ではない人はそこで呼び覚まされこの世に戻ってくるという。夢の場所はあの世なのかも知れない。想像もできないことだが、実際にあの世の人が夢に出てくる事があるのだから本当なのかもしれない。

感動した点は、花梨が出て行くと言った日にお互いの気持ちが分かったのに、無理矢理に別れようとした。佑司は自分が呼び戻すと言って永い眠りについたこと。そして、亡くなっても最後まで、父親が息子のために力を尽くした親子の絆が感動しました

亀山智美

佐藤多佳子『一瞬の風になれ』（講談社、2006年）

#### 【あらすじ】

この本は全三巻あります。一巻目は、中学三年生の新二が春高で陸上を始めるところから話が始まります。中学時代にサッカーの得意な兄の影響でサッカーを始めた新二でしたが、新二にサッカーは向いていなくていつもマイナス思考の塊でした。

そんなある日、幼馴染で大の仲良しの連が新二を陸上に誘い、二人は春高の陸上部に入部しました。連は全国の中学生の大会で優勝するほどの実力者でしたが、なじみにくい性格のせいで中学では途中で陸上をやめていました。

春高の陸上部は、やさしいけど厳しい顧問の「みっちゃん」や頼りになる先輩、真剣に陸上に向き合っている仲間たちがいました。そんな環境の中で始めた陸上は、二人に思いがけないくらい大きなものを与えてくれました。

新二はどんなにつらい練習でも陸上がうまくなりたいたい一心で倒れるまでかじりついて



いきました。最初は何をやってもうまくいかないし、連がやめそうになったこともあったけれどいろいろなことを乗り越えて陸上を好きになっていく姿が生き生きと描かれています。

二巻では上級生になって環境が変わった中で戸惑いながらも前に進んでいく姿が、三巻では陸上に対しても仲間に対しても熱い、真剣な気持ちを持って陸上と向き合う姿が映し出されています。

そんな中で一番重点が置かれていたのが「リレー」です。リレーは4人の気持ちがひとつになって初めて成功するものです。そのために陸上部員は日々必死に練習をしていました。この緊迫感が伝わってきたのはこの本の文体が特徴的だったからだと思います。この本は現代の話し口調で書かれているので、感情移入しやすく、自分がまるでその場にいるかのような気分になれます。だから自分がもう一度高校生になって生活しているようで、共感できる部分がたくさんありました。緊迫した場面になると息が詰まったり、走っているときは読むリズムが速くなったりと、自分が本に操られているかのような体験ができました。

私が特にドキドキしたのは試合の場面でした。それでは、その試合の場面をご紹介します。

「俺は浦木さんの脱いだジャージやアップシューズをまとめて持て、3走の走り終える地点、つまり4走のスタート地点まで関さんと一緒に移動した。ピストルがなり、1走がスタートした。春高はアウト寄りの7レーン。島田さんは前のほうを走っている。でも、上位かどうかわからない。リレーは段差スタートで、アウトレーンほど前から出るから、外側を走ってる奴は前にも内側を走っている奴より遅れていたりする。その辺の見極めが俺には出来ない。素人の悲しさ。先輩や経験者の一年は順位

が一目でわかるみたいだけど。

うわっ、守屋さんにバトンが渡った。トラックの四分の一周って、何て早く走れてしまうんだろ。2走はエース区間だから、みんな早い。でも、守屋さんも、ウチのメンバーでは一番早い。外側の8レーンの奴をどンドン追い上げている。差が詰まる。並びそう。いいぞっ。抜いちまえっ。抜きそうで抜けない。夢中で「行けっ、行けっ」とか叫んでいた。抜いたか？抜いたのかな？守屋さんのほうが前を走っている。やった！チェックマークを守屋さんがこえ、浦木さんがスタートする。バトンパス、よしっ、つながった。

浦木さんが走る。いつもハードルをぶきっちょに飛び越したり蹴倒したりしてるひよろ長い足がコーナーにピッチを刻んでいく。大丈夫か？風はどっちだ？いきなり東に変わったりしねえだろうな？

「何位ですか？」

思わず関さんに聞くと、

「3位だ」

とソッコー答えが返ってくる。

「もっと声出せ、バカ」

「浦木先輩、ファイトー！」

俺は大声を張り上げた。

「春高、ファイトー！」

アンカーの岡林さんにバトンが渡り、直線に入る。ここまでくると、スタート時の差がなくなり、見た目通りの順位になる。誰でもわかる。ウチは4位に落ちている。のどが痛いほど叫んだ。何言ってたかわかんねえ。とにかく勝て勝て勝て勝てっと思った。ああ、ゴールだ。並んで飛び込んでいく。3位だか4位だか5位だか、わかんねえ。

「何位ですか？」

咳き込むように聞くと、

「4位……かなあ？」

関さんも首をひねっている。

「それってOKですか？」

「タイムでないとわからない。この組、早かったから。ウチも悪くないレースだったと思うけど。岡林さん、すげえ頑張ったよな、最後」

「はい」

ラストの競り合いはものすごかった。後ろから見る形になってわかりにくかったけど、メチャ迫力あった。」(63～65頁)

他の巻でももっとドキドキするところがたくさんあります。また、試合だけでなく恋の悩みや、ばかみたいに死ぬほど練習する場面など高校生だからこそ経験できる話が盛りだくさんです。

わたしは、この本を読み終わったときに無性に走りたくなりました。それほどみんなが真剣に陸上と向き合っている姿に心動かされたのです。

読むたびに悔し涙や感動の涙、笑顔が思わずこぼれてしまうような青春感想ストーリーです。

保坂茜

中原みすず『初恋』（リトル・モア、年）

あらすじ

この話は昭和の事件史の中で最大のミステリーのひとつとして記憶される三億円事件の犯人だと主張する著者が書いたものである。

1968年（昭和43年）12月10日午前9時30分頃、日本信託銀行（後の三菱UFJ信託銀行）国分寺支店から東京芝浦電気（後の東芝）府中工場へ、工場従業員のボーナス約3億円（正確には2億9430万7500円）分が入ったジュラルミンのトランク3個を輸送中の現金輸送車が、府中刑務所裏の府中市栄町、学園通りと通称される通りに差し掛かった。

そこへ警官に変装して擬装白バイに乗った

犯人が、バイクを隠していたと思われるカバーを引っ掛けた状態のまま輸送車を追いかけて、輸送車の前を塞ぐようにして停車した。現金輸送車の運転手が窓を開け「どうしたのか」と聞くと、「あなたの銀行の巣鴨支店長宅が爆破され、この輸送車にもダイナマイトが仕掛けられているという連絡があったので調べさせてくれ」と言っを行員を輸送車から降ろさせた。

実はこの4日前に、支店長宛ての脅迫状が送り付けられていた為、その雰囲気に行員たちは呑まれてしまっていた。犯人は、輸送車の車体に潜り込み爆弾を捜すふりをして、隠し持っていた発炎筒に点火。「爆発するぞ！早く逃げろ」と避難させた直後に輸送車を運転し、白バイをその場に残したまま逃走した。この時行員は、警察官（犯人）が爆弾を遠ざけるために輸送車を運転したと勘違いし、「勇敢な人だ」と思ったという。

この出来事を目撃者には銀行員のほか府中刑務所の職員、近くにいた航空自衛隊員などがいた。さらに犯人が残した遺留品が120点もあったことにより、犯人検挙に向けて楽観ムードがあった。ところが目撃者の証言は曖昧な点が多く、しかも遺留品はどれも普通のもので、大量生産時代の障害に突き当たってしまった。各遺留品を手掛かりに捜査しても大量の生産量で全国に出回っているとすれば、現実的に犯人に行き着く事は無理であった。容疑者リストに載ったのは実に11万人、捜査した警官延べ17万人という空前の捜査だったが結局、犯人を検挙できずに事件は時効を迎えた。

主人公はこの本の著者である中原みすず、当時高校3年生。みすずは、両親を失い親戚の家をたらいまわしにされ、今いる叔父叔母の家でも日々皮肉を言われ、存在すら認められていないような扱いをうけていた。ある男に襲われそうになったことで男性不信にもなり、生きている意味を見出せない

生活を送っていた。

そんな彼女が向った先は、ジャズ喫茶<B>であった。店先で出逢った女性に誘われるがまま店内へと向かい、そこに毎日のようにたむろしている亮を中心としたグループと出逢った。それからみすずは、<B>で過ごす日々が日課になっていった。

ある日、亮のグループの一人である岸から相談を受けた。現金輸送車を襲う手助けをしてくれないか、と。

そうしてみすずは、上記の三億円事件を実行することになる。

この事件を通してみすずと岸の間には恋心が芽生えていくが、岸は本当に好きな女の前では何も出来なくなる性格であり、みすずは過去の経験から男性不信、もはや人間不信の域であり、二人の距離はなかなか縮まらない。事件の後、みすずは大学受験を終え、無事第一志望に合格する。そして岸が探してくれたアパートで一人暮らしを始める。しかし月日が経つごとに周囲はみるみるうちに変わっていく。ジャズ喫茶<B>で出会った仲間は次々と不慮の死を遂げ、岸は2年で帰ると手紙をよこしたが、それから7年後の手紙を最後に消息は途絶えた。みすずの心に深い溝を残したままこの物語は終わる。

#### 感想

最後まで読んで、本当にこの著者は三億円事件をやったのかどうか疑問が残る。なぜならこの本の軸としてあるのはみすずと岸の恋愛であるからである。本文にもあったが三億円事件でのことは岸とみすずの関係を深いものにした事が本質であり、事件そのものには本質を置いていない。あまりにも三億円事件という大ニュースに関してドライなので、不思議な印象を受けた。しかしそれがさらにこの物語のリアリティをかもし出していて興味がわいた。

みすずと岸の関係はもどかしすぎで、まさに「初恋」なのだろうけど、浅すぎず深すぎず、深すぎないのだけど辛いというその微妙な危うさみたいなものが、作品をよくしているような気がした。事件の犯行を行なうシーンはアクシデントが多くおもしろかった。最後の終わり方はすっきりしなく、作品全体が暗いイメージで良い印象ではないが、妙にインパクトのある作品だった。

石塚 聖味

西加奈子『さくら』（小学館、2005年）

#### あらすじ

ある一家とその家のペットである犬の物語。家族構成は主人公のごく普通の僕、とても人気者でカッコいい兄ちゃん、美人だが変わっている妹の、きれいな母さん、穏やかな父さん、メスなのにオスみたいな犬のサクラである。皆仲良しの幸せな家族だった。しかし、兄ちゃんに彼女ができてから少しずつ事態が変わっていく。兄ちゃんは彼女が大好きでしばらく幸せだったが、彼女が母親の都合で引っ越してしまう。それでも手紙でやりとりしていたが、ある日から突然手紙が来なくなってしまう。それをきっかけに兄ちゃんは落ち込み、ぼんやりすることが多くなってしまった。月日がたち新しい彼女ができて前回の彼女のことをひきずってしまい、そんな自分を責めてしまう。ある日また彼女のことを考えてしまった兄ちゃんは、気

分転換にコンビニに行く途中で事故にあってしまう。雨の日に猛スピードで飛ばしていたタクシーにより下半身と顔の右半分表情を奪われてしまう。兄ちゃんは車椅子の生活になり、カッコよかった顔もぐちゃぐちゃになってしまい、人に見られるようになってしまう。生きる気力がなくなってしまった兄ちゃんは、何をすることもめんどくさくなる。そしてある日公園で「この体

で、また年を越すのが辛いです。ギブアップ」と書かれた紙切れを残し、首をつつてしまう。二十歳のときだった。その何日か前に、僕は妹が兄ちゃんの前の彼女から手紙を隠していたことを知ってしまう。妹が泣きながら僕の前で彼女の三年分の手紙を読んだのだった。兄ちゃんと彼女の恋を終わらせたのは妹だったのだ。妹は兄ちゃんに絶望的な恋をして

いた。その話を知った父さんは家から出て行ってしまふ。母さんも兄ちゃんが死んでから酒におぼれどンドン太り、精神も不安定になってしまう。そして僕も大学進学を理由にして家を出る。ぐちゃぐちゃになってしまった家族が月日がたち父さんの「大晦日に帰ります。」という手紙から久しぶりの再会を実現する。ごちない家族がサクラの具合が急に悪くなることを通じてまた再びまとまっていく。

#### 感想

最初のほうは3人兄弟の幼いころの話がたくさん書いてあり、そこからとても仲よしの幸せな家庭だと伝わってくる。しかしだんだんと一家の歯車が狂い始め、ついには兄ちゃんが自殺してしまうという、思いがけない展開になっていた。そして辛いことがあっても家族が生きていくという姿に感動した。

川辺卓也

東野圭吾『秘密』（

1998年8月出版。第52回日本推理作家協会賞（長編部門）受賞。1998年「本の雑誌」が選ぶ日本ミステリー第1位。1998年「週刊文春」選傑作ミステリーベストテン第3位。1999年9月、滝田洋二郎監督、広末涼子、小林薫主演で映画化。

幸せで平凡な日常を送っていた主人公の男性にある日突然悲劇が訪れる。バス事故に

より妻が重態、同行していた娘も医師から植物状態を宣告される。しかし、妻の死と同時に娘の意識が蘇り、喜びの最中、娘は言う「あなた・・・」娘の体に妻の意識が。娘、藻奈美として、人生をやり直そうと二度目の青春を謳歌する妻、直子と、娘の体を持った妻にとまどい一人取り残され疎外感を味わう夫、平介。バス事故の真相が明らかになるとともに、事態は意外な展開を見せる・・・奇妙な二人暮らしが始まる（1999年9月2日記）

心と体の入れ替わりをモチーフにした小説は数多くあるが、本作品はそれを単なる荒唐無稽（でたらめ）なファンタジーに終わらせず、リアリティーを持たせることに成功している点で他を圧倒している。なんと言っても人間がきちんと描けていて、心と体の入れ替わりはそのために用意された小道具に過ぎないと言ってもよいのかもしれない。

この小説は主人公である平介の目を通して語られていくが、娘の体を持つことになった妻に対するとまどいと混乱、二度目の青春を謳歌する妻に対する嫉妬と疎外感。

（よそよそしくする感じ）妻の男性関係に対する疑心暗鬼。（うたがう心が強くなると、なんでもないことが恐ろしく感じられたり、うたがわしく思えたりすること）断念せざるを得ない夫婦間の性交渉と、他の女性へ惹かれていく心。そういった全てを決してきれいごとでは済ませることをせず、人間の持つ弱くて情けなくて醜くて滑稽な面（とりもなおさず最も人間的な面）がごまかされることなく淡々としかもユーモアも交えて描かれていくのである。そういった平介の心の動きには、読者が男性であれ女性であれ、容易に感情移入することができるはずだ。

東野さんの主要作品の多くが複雑に張られた伏線を背景にスリリングに展開してい

くの比べると、この作品の本線となるストーリー☆1、平介と妻との不可解な日常生活、は意外なほどまっすぐに進んでいく。一方でバスの転落事故の真相追求という読者の推理小説的な関心を惹きつけるテーマが本線と絡みながら展開していき、作品は一種の二重構造をとることになる。 作品の後半でバス事故の真相が運転手男性の二重生活による過労ということが明らかになる。肉体の持ち主である娘、藻奈美の意識が目覚めはじめるといふ意外な展開を見せる場面もあるが（一度目のどんでん返し）、このままエピローグ（終結部）へ進むのではなく、最後の数ページになって、妻の意識の再来という二度目のどんでん返しが用意されている。ここに至って読者はようやく「秘密」というタイトルの意味するところを理解することになるのですが、この最後に明かされる「秘密」については読む者によってさまざまな受け止め方が可能だと思う。私は、一貫して平介の苦悩が語られていながら、平介の目を通して描かれていた妻、直子の悲しみと苦しみがテーマではないかと考える。要するに、一つの体を通して妻と娘が交互に現れるように見えて、実は全て妻、直子の演技によるところであったのではないかと思うのである。このような直子の行動は、二人で秘密を共有したい気持ちと夫を苦しめたくない気持ちの間で苦しんで、片方を選び切れなかった結果だと思う。語られることのなかった直子の気持ちがありありと浮き彫りにされているのを読み進めて行く中で垣間見ることが出来る。しかし死ぬまで娘のふりをして、生きていくのは、あまりにもせつなすぎる。

しかしながら、永遠の「秘密」を守り通す覚悟と諦念（テイネン）＝（あきらめの気持ち）の彼方にほのかに明るく見え隠れする未来が感じられる。しかも深刻なテーマなのに全体を通してユーモラスな味わい

も感じられる。手紙と秘密と分身と変身と言う作品を読んで何となく東野作品の特徴は掴めた気がする。起承転結という結の部分が灰色なのだ。その後にも何かありそうな、そういう感じで終わっている。まとめすぎな終わりよりはいいと思いますが。

本作品の平介の男性像は、おそらくウソ偽りのないかなり等身大のというか、ごく普通の善良な男性なのだろうなあと思いました。一方、直子。直子の努力と、決心。傷ついても先に行こうとする強さ・・・それは自分の為以上に平介の為もあると思うのですが・・・が切ない！ひとによって大きくその評価というか感想が分かれてしまう1冊だと思う。

娘なら父親として接するコトが出来るのに。妻ならば夫として接するコトが出来るのに。どちらでもあり、どちらでもナイ存在になってしまった直子。旦那であり父親である平介とのやりとりをお楽しみ下さい。

朗読 p 4 2 3 1 9 ~ p 4 2 9 1 1 5

今から朗読するページは直子が藻奈美として生きていこうと決意し、心身ともに藻奈美へと変わっていく部分です。

鈴木あゆみ

変身（東野圭吾）講談社 1993、講談社文庫 1994

<あらすじ>

主人公である成瀬純一は、内向的で優しく、絵を描くのが趣味の、普通の青年。画材屋の恵とのつきあいはじまったばかりで、平凡な日々を送っていた。だがある日、不動産屋で不慮の事故に巻き込まれた。強盗から幼い少女を守ろうとして頭を打たれたのである。長い眠りからさめたらそこは病院。そして、損傷を受けた部分に他人の脳片を移植したという世界初の脳移植手術が行われたと聞かされる。回復は順調で退院

後日常生活に戻る純一だった。しかし、自分がどんどん別の人間になっていくのを感じ始める。以前とは食べ物の好みが一変し、描く絵のスタイルも変化する。そればかりか、勤め先の工場でも、以前は人と争うことなど皆無だったのに、同僚たちの仕事を厳しく批判したり、アパートの隣に住む若者にも、殺意を感じるようになった。そして愛する恵にさえ愛情を感じなくなっていく自分に気づく。恵とも距離をおくようになった。日に日に明らかに変わっていくもう一人の人格への変身。しかし、医者たちは真実を何一つとして教えてくれなかった。純一は自分に移植された脳の持ち主であるドナーの影響ではないかと考えた。そして、彼自身で探り始めた。そのドナーとは事件の犯人京極瞬介であったのだ。外見は純一でありながら、次第に、心は京極におかされてゆく。常に感情的にならないように自分を抑えるのに必死だった。そんな中ピアノの音色だけが唯一自分を落ち着かせてくれた。ピアノは京極の唯一の得意分野だったのだ。しかし、ある日純一は、近所で飼われている犬を殺した。そして自分を裏切った人間までも殺した。この恐ろしい殺意は、もはや京極という異常者の脳の一部を持ってしまった自分ではどうしようもできない。変わって自分を止めることはできないのだ。脳全部が京極の脳に乗っ取られるのは時間の問題である。そして、犯罪者として捕まるのも。ならば、ぎりぎりまでピアノではなく、絵を描くことが大好きだった純一でいたい。彼がそう決心した時、目の前には恵がいた。戻ってきたのだ。恵は変わり果てた純一を、前と変わらず愛し続けていた。きっと、昔みたいに戻ると信じて。しかし、純一の中には恵をも殺してしまおうという殺意がうまれた。恵の首を絞めようとした時、かわいそうだという思いが頭をよぎった。そう、恵みも同

じ被害者であるという思いだ。昔の純一が一時的にもどってきたのである。純一の心は死んでなんかいなかった。純一は最後の可能性を信じ、病院へいき、再手術を強く希望した。最後の可能性とは移植した部分をそっくりそのまま取り除くことであった。廃人になる覚悟で。しかし医者は、生きている人間の意識を奪うようなことはできないと断った。ドアをでると純一は自らの手で移植された京極の脳を打ち抜いた。そして純一は幸福感がたたえられたような顔のまま無意識の世界で生き続けたのだ。

#### <感想>

自分とは一体何なのであろう、生と死、そしてむやみに生命を繋ぎ止める事は本当に正しいことなのか、とすぐく考えさせられる作品だった。内容的には途中で結果が読める作品ではあったが、最後まで惹きつけられ一気に読むことができた。しかも近未来の話だったのだが、妙にリアリティも感じられた話だったので、より没頭して読んでしまった。また、ハッピーエンドで終わるかと思ったら、あまりにも悲しい結末だったので、最後の場面は読むのが辛かった。自分が何か別のものになってしまう恐怖や不安、愛する人を愛せないというやるせない気持ち、そして純一が自分自身と葛藤しているところや自己崩壊の場面などを残酷に書いているところが多々あり、主人公純一に対する恐怖感を読んでいる最中ほとんどもっていた。心情面もかなり迫力があつた。その一方で恵の純一をひたすら思い続ける一途さにも心を打たれた。彼女の深い愛情には、涙しそうな場面が多々あり、いつの間にか、恵側にたつて、恵み自身になって読んでいたところもあつた。また、書き方は主人公視点からだけではなく、担当医師や恋人、刑事の視点からの文章が日記形式でかかれていたので、それぞれの

心情も読みやすかった。

僕の心は変化している。それは明らかだ。

恵、君を愛したいのに、愛する気持ちが消えていくー。

関口淳史

金城一紀『GO』（講談社，2000年）

この小説は直木賞を受賞した他、2001年10月20日映画化された同名の作品は日本国内の映画賞で数多くの映画賞を受賞しました。内容は僕から見てとても面白いものでした。まずあらすじはというと。在日韓国人三世の杉原は、日本の普通高校に通う3年生です。朝鮮の大使館でもともと働き、元プロボクサーでもある父親に叩き込まれたボクシングで、ヤクザの息子の加藤や朝鮮学校時代ウォンス達や悪友たちとケンカや悪さに明け暮れる日々を送っていた。

ある日、杉原は加藤の開いたパーティで桜井という風変わりな少女と出会って、ぎこちないデートを重ねながら少しずつお互いの気持ちを近づけていきます。そんな時、唯一の尊敬できる友人であったジョンイルが、些細な誤解から日本人高校生に刺されて命を落としてしまう親友を失ったショックに愕然としながらも、同胞の敵討ちに向かう

仲間には賛同できない杉原は桜井に救いを求め、勇気を振り絞って自分が在日であることを告白するが…っといった感じです。実はこの後杉原は桜井に「パパから、在日の人には近づくなって言われてたの」と言われてしまい。このことがきっかけで、桜井から距離を置かれてしまいます。また、ストーリーの中で注目してほしいのは主人公の杉原と、親友の正日との交流た、また杉原の父が作中でよく起こす。奇妙な行動などが見ものでした。実は僕自身一回も小

説という物を最後まで読んだことがありませんでした。しかしこの本は、一見若者にも読みやすいストーリーにも思えますが。実際に読んでいくと、今に日本に存在する。日本社会と、在日の人たちとのリアルなところがしっかりと書かれています。実際に作中で杉原は恋人の日本人である桜井に自分は在日韓国人であることを、ずっと隠していました。私はこの作品の凄いところは今の在日韓国人の人たちが抱く悩みと、その今の日本社会にある問題、そして、恋の話までとそのすべてを読み手に伝える技がすごいと思いました。

長谷川育世小川洋子

『博士の愛した数式』（新潮社，2003）

知っている人も多いと思いますが、博士の愛した数式を紹介します。この話は、寺尾聰や深津絵里出演で映画化されていて、最近テレビでもやっていました。私は映画も観たのですが、先に本を読みました。この話の主な登場人物は、交通事故で80分しか記憶がもたなくなってしまった博士と、博士のお世話をする家政婦と、家政婦の10歳の息子、ルートです。ある日、家政婦は、数年間で担当が何回も変わったという顧客を紹介されます。面接のため派遣先に行くと、上品な身なりのご婦人ー未亡人が彼女を迎えました。母屋に住む未亡人は、離れに住む義弟ー博士の世話をするように頼みます。博士は大学の数学研究所への就職が決まっていた。しかし、交通事故に合い80分しか記憶がもたない病になってしまい職を失います。今は亡き博士の兄の妻の援助を受けて生活するようになりました。そして、家政婦を雇いました。働きはじめの日、玄関に現れた家政婦に博士が最初に聞いたのは、名前ではなく靴のサイズでした。「君の靴のサ

イズはいくつかね」「24です」「実に潔い数字、4の階乗だ」博士は何をしゃべっていいか分からないので、言葉の代わりに数字を用いていました。この会話は毎日繰り返されました。博士の背広には忘れてはならない事柄が書かれたメモ用紙があちこちにクリップでとめられていました。ある日、家政婦に10歳の息子がいることを博士は知ります。小さな子供がたった一人で留守番していることにしてもたってもいられなくなった博士は、今後は学校帰りにここへ来させることを約束させます。それから、博士と家政婦とその息子三人の生活が始まります。博士は息子をルートと呼びました。「どんな数字でも嫌がらずに自分の中にかくまってやる実に寛大な記号、ルート」ルートが訪れるようになってから笑顔が絶えなくなりました。三人は打ち解けていきます。ある日、ルートの野球の試合に家政婦と博士は応援に行きます。炎天下のせいか博士は熱を出して寝込んでしまいます。家政婦の組合の規則を破って、二人は泊り込んで看病しました。朝、家政婦が博士に声をかけると博士は泣いていました。毎朝、目が覚めて服を着るたび、博士は自分が罹っている病を、自らが書いたメモによって宣告されるのです。さっき見た夢は、昨夜ではなくて、遠い昔、自分が記憶できる最後の夜に見た夢なのだと気付かされます。

昨夜の自分は時間の淵に墜落し、もう二度と取り返せないと知り、打ちひしがれていました。数日後に博士の風邪は治るのですか、泊まったということで未亡人がクレームを出し解雇されてしまいます。しかしその間も家政婦とルートは友達として博士に会いに行き、最終的には再び博士の家政婦として働くことができます。野球観戦に行ったりルートの誕生

日会をしたり楽しく過ごします。その後、博士は医療施設に入ることになりました。それでも一ヶ月か二ヶ月に一度、二人は博士に会いに行き、お昼を一緒に食べたりキャッチボールをしたり、博士が死ぬまで何年にも亘って

続けました。ルートは中学の数学の先生になりました。このお話を読んで、私は数学がきれいなのですが、数学の魅力を感じることができました。博士は数字を美しいと

表現していて、そのようなものの見方もあるのだな、と思いました。日常で使う何の変哲もない、例えば28という数字を「完全数」(連続した自然数の和で表すことができる数字、 $28 = 1 + 2 + 3 + 4 + 5 + 6 + 7$ )と見たり、24を「4の階乗」と見たりするだけで、ただの数字ではなくなり、面白いと思いました。本の中で、家政婦の誕生日2月28日、「228」と、博士の腕時計に刻まれている「220」という数字が、それぞれの数の約数の和が、もうひとつの数字になるという数少ない友愛数、と発見するところがあります。

「神の計らいを受けた絆で結ばれ合った数字なんだ。美しいと思わないか？君の誕生日と、僕の手首に刻まれた数字が、これほど見事なチェーンでつながり合っているな

んで」 これを読んで、数はロマンチックだと思いました。また、三人が一緒に過ごしている時間など読んでいて心がとても温まりました。ルートや家政婦は博士の記憶に刻まれないのですが、ルートや家政婦はそれを苦と感じたような態度は示さないで、お互いにおもいやりがあってとても素敵な人間関係だと思いました。数だけではなく子供に対する博士の愛もとても伝わってきました。立元哲僕の愛読書は夏目漱石の「こころ」です。



僕がこの本を読んだのは、高校二年生の国語の授業のときでした。ではあらすじを紹介したいと思います。若い書生であった「私」は鎌倉の由比ガ浜で外国人と二人連れであった「先生」と出会います。私は何日か先生のあとをつけているうちに先生と近づきになります。それから先生のうちにも通うようになり、先生と思想問題を語り合うようになります。先生と親しくなるうちに私は先生と自分の父を比べるようになり、先生を自分の親よりも大切におもうようになります。そんな時、田舎の父の症状が悪化し、実家から呼び寄せられます。兄と妹の兄も呼び寄せられました。そして父がいよいよ危篤になったとき、先生から遺書が届きます。私は急いで東京に戻ります。遺書の中で先生自分が昔恋人を得るために友人を裏切りその友人が自殺したことが書いてありました。そして先生は殉死を選びます。次の文章は僕が気に入ったものです。

あなたは現代の思想問題についてよく私に議論を向けたことを記憶しているでしょう。私のそれに対する態度もよくわかっているでしょう。私はあなたの意見を軽蔑まではしなかったけれど、決して尊敬を払いうる程度までにはならなかった。あなたの考えには何らの背景もなかったし、あなたは過去を持つにはあまりに若過ぎたからです。私は時々笑った。あなたは物足りなさそうな顔をちょいちょい私に見せた。その極、あなたは私の過去を絵巻物のようにあなたに展開してくれと迫った。私はその時初めてあなたを心のうちから尊敬した。あなたが無遠慮に私の腹の中から或る生きたものを捕まえよう決心を見せたからです。私の心臓を立ち割って温かく流れる血潮を啜ろうとしたからです。そのとき私はまだ生

きていた。死ぬのがいやであった。それで他日を約してあなたの要求を斥けてしまった。

私は今自分で自分の心臓を破ってその血をあなたの顔に浴びせかけようとしているのです。私の鼓動が停まったとき、あなたの胸に新しい命が宿ることができるなら満足です。私はこのとき、人と人のコミュニケーションについて深く考えたことがありませんでした。この本を読んだとき、人から教わることの大切さを考えさせられました。そうしたら、勉強が楽しくなりました。

二十歳の頃

亀山智美

母の二十歳の頃をインタビューしました。母は子どもがやりたいことを後悔しないようにやらせるという子育てをしてきました。実際に私はあまり怒られなかったし、やりたいことをやる時は母がサポートしてくれていました。そんな母がどんな人生をおくってきたのかを知りたくて母にインタビューしました。母がこのような考え方になったのは厳しい祖父に育てられたことと保育士としての経験からだと思います。祖父は昔とても厳格で、話すのも怖かったそうです。そんな父親を反面教師にして子育てをしてきたと聞きました。その後兵庫女子短期大学に進学しました。保育士になろうと思ったのは進学先を考え始めたときで、子どもが好きで資格が欲しかったので決心したそうです。とにかく人のためになりたくて看護師になろうと考えたこともあったとのこと。母が二十歳の頃にはやっていたことをきいたところ、そのころはピアノの練習に忙しくて流行物に気を向けている時間がなかったそうです。でも読書はしていたそうで、好き

だったのはアガサクリスティーでした。保育士として辛かったことは給料が安かったことで、楽しかったのは子どもの笑顔と成長が見られたことだそうです。そんな中でも辛かった時はアンパンを食べてたくさん寝ると復活できたそうで、今でも辛いことがあるとすぐに寝てしまいます。座右の銘は「七転び八起き」だそうです。確かに、何かあるととことん考え抜く姿勢がそれを表していると思います。私はそんな母の生き方を尊敬しているし、母のようになりたいです。